海苔あれは乏しうもなし雨の宿　甘志
いねつむや日和のよきをほめた後　氷壺
啼て後風のうくひす飛にけり　新甫
太箸や手にとらぬ間のひと風情　春湖
入るとて袖をせはかる手まり哉　野井
初鶏やしすましたりと諷ふさま　太年
濃過れは屠蘇も倦るゝ柳哉　香以
わひしさの日ことにかはる霞かな　尋香
手近くの梅つまみ込雑煮かな　永機
何となくくゝりて見たし夕柳　露心
のこる雪汁の実さかす畑かな　如白
松過た宿のゆとりの朝寐かな　潮堂
市中や人声からも春のたつ　禾暁
酔た眼にいよ〳〵赤き椿かな　桐齋
勝手にも一鉢見えぬふく寿草　雪年
むつましき風と柳のそふりかな　山台
御さかりの有しゆとりや鐘の声　草仙
草木より深きみとりや初御空　芳泉
ひる月のちひさく出たる余寒哉　弘美
わか水の雫うれしき手先かな　可嘯
鶯の垣飛こしてくれにけり　ミき雄
梅の花紅葉の後の遠出かな　花外
雪ちるや猫のかよひ路見ゆるほと　貫乎
香はしりて道のつきけり岨の梅　為山

閑居幽事多

うくひすや思ひよらさる風の中　きく雄
ちさくとも庵は持たし初日影　聞賀

癸亥の春　素阿書　印